

「やさしい日本語」講座担当者が考える 「やさしい日本語」とは何か — 「ベテラン」「中堅」「初任者」の比較 —

辻本桜子

甲南大学 全学共通教育センター
神戸市東灘区岡本8-9-1, 658-8501

要旨

本稿は日本語母語話者にとって「やさしい日本語」とは何か、使用者の「意識」「マインド」の面からその意義を考察するため、「やさしい日本語」の指導者である講座担当者を対象に調査を行い、その結果をまとめたものである。調査対象者は「やさしい日本語」の講座担当者（経験回数により、ベテラン、中堅、初任者の3群に分類）であった。自由記述式アンケートの結果、「初任者」については主に日本語の形式に関する語が、「ベテラン」については外国人との接触場面に関する語、「やさしい日本語」使用者の「意識」に関する語がキーワードとして見られた。つまり、講座担当の経験を重ねた者は、他者への「やさしい日本語」の指導を通して、より「多文化共生」へと態度の変化が見られたということである。本調査の結果から、今後「やさしい日本語」の日本語母語話者にとっての「意識」「マインド」面での意義を考える示唆を得た。

キーワード: やさしい日本語、講座担当者、意識、マインド、テキストマイニング

1 はじめに

「やさしい日本語」とは、1995年の阪神・淡路大震災がきっかけとなり考案された日本語のことである。法務省出入国在留管理庁の在留外国人統計（旧登録外国人統計）によると、在留外国人の国籍・地域数は195に及んでいる（2023年6月末現在）。災害のような緊急事態発生時に多言語通訳、翻訳での対応は難しい。そのため、外国人を対象とした防災、減災のため、文法や語彙を簡単にした「やさしい日本語」が有効であると考えられ、進んで使われるようになっていった（詳細は後述）。このように「やさしい日本語」はその考案背景から外国人向けの日本語と思われ、外国人との接触機会が少ない日本語母語話者には認知度が低いようである。

文化庁国語課（2020）の「国語に関する世論調査」の結果によると、「やさしい日本語」について「知っている」が29.6%、「知らない」が68.1%であった。認知度が高くないだけでなく、庵（2016）には、「やさしい日本語」について全国各地で行った講演会やワークショップの場で「なぜ外国人のために日本人が譲歩（筆者注：日本語をやさしくして使うことを）しなければならないのか」「外国でそんなことをやっている国はない」という反応をする母語話者がいたと記されている（庵2016, p.189, p.200）。また、庵（2021）では2018年6月8日のTBSテレビ「ひるおび！」で、「やさしい日本語」が取り上げられた際の落語家でコメンテーターの立川志らく氏のコメントが紹介されている。曰く、「全部こんな風に（筆者注：「やさしい日本語」を使って）説明すると日本人全体がちょっとバカになったような気がします（スタジオ笑）」ということである（p.125）。

これに対し、庵（2016）ではこうした「やさしい日本語」に対する反応は「もったいない」と述べられ（p.200）、「やさしい日本語」は「外国人のためだけのものではない」とも述べられている（庵2015, p.3）。また、庵（2016）では「やさしい日本語」は母語話者にとって、「日本語力を高める絶好の機会」であり、そして、日本語力を高めることは「コミュニケーション力を高めるために不可欠」なことであると述べられている（pp.200-201）。類似の主張は庵（2015）でもなされており、「やさしい日本語」を用いた接触場面による言語調整という観点から、母語話者にとってその使用は「表現力を磨く手段」として有用であると述べられている（p.9）。

本稿筆者もまた、日本語母語話者にとっての「やさしい日本語」の意義について関心を持っている。中でも、筆者の関心は「やさしい日本語」の使用を「自己成長」に繋がると捉える宇佐美（2019）に近い。その意義を、使用する母語話者の「意識」「マインド」の観点から考えることに興味を持った。庵（2019）もまた、「やさしい日本語」にとって重要なのは、「技術」よりも「マインド（考え方）」であることを指摘している（pp.14-15）。しかしながら、庵（2019）では主張を述べるに留められ、実証はなされていない。そこで、本研究では「やさしい日本語」とは何か、他の母語話者より「やさしい日本語」を熟知しているであろう「やさしい日本語」の講座担当者である日本語教師を中心に、意識調査を行うことにした。彼らの回答から、母語話者にとって「やさしい日本語」とは何か、その意義を「意識」「マインド」の観点から考察したい。

2 「やさしい日本語」

2.1 「やさしい日本語」の成立背景

ここで、「やさしい日本語」とは何か、もう少し詳しく述べる。まず、成り立ちについては、前章で述べたように1995年の阪神・淡路大震災を背景に持つ。震災直後の情報提供は、日本語と英語でしか行われていなかった。しかし、実は震災当時、兵庫県の在留外国人数は東京、大阪、愛知、神奈川に次ぐ国内第5位で、約97,000人が暮らしていた。在住者の国籍は1位韓国・朝鮮（70,312人）、2位中国（13,102人）、3位ベトナム（1,662人）、4位フィリピン（1,231人）、5位インド（1,027人）であった（法務省出入国在留管理庁 在留外国人統計 1994年12月末現

在)。このように多言語・多国籍の外国人が在住していたにもかかわらず、震災直後に情報提供が行われた言語には限りがあったため、逃げ遅れたり、復興過程で支援が受けられなかったりする外国人がいたのである。そこで、緊急時に外国人に対する情報提供をするため文法や語彙を簡単にした日本語の必要性が言われるようになった。これが「やさしい日本語」の始まりである。

2.2 「やさしい日本語」とは

では、「やさしい日本語」とはどのようなものか。以下に松田ほか（2000）より例を記す。

<原文（NHK：ニュース原稿より）>

けさ5時46分ごろ、兵庫県の淡路島付近を震源とするマグニチュード7.2の直下型の大きな地震があり、神戸と洲本で震度6を記録するなど、近畿地方を中心に広い範囲で、強い揺れに見舞われました。（松田ほか2000, p.149）

<言い換え文>

今日、朝、5時46分ごろ、兵庫、大阪、などで、とても大きい、強い地震がありました。地震の中心は、兵庫県の淡路島の近くです。地震の強さは、神戸市、洲本市で、震度が6でした。（松田ほか2000, p.149）

原文は阪神・淡路大震災当日の朝7時のニュースでNHKにより放送された原稿である。言い換え文は松田ほか（2000）がそれを書き改めたものである。たとえば「けさ」「付近」「震源」などの難易語は、それぞれ「今日、朝」「近く」「地震の中心」と言い換えられている。「マグニチュード」「直下型（地震）」という語は「理解されにくくまた、情報としての緊急度も低い」（松田ほか2000, p.150）ため、省略されている。文法については、原文の「兵庫県の淡路島付近を震源とするマグニチュード7.2の直下型の大きな地震があり、」という部分は、「地震」という名詞の前に「兵庫県淡路島付近を震源とする」と「マグニチュード7.2の直下型の大きな」という2つの長い修飾部があり、構造が分かりにくくなっている。そこで、言い換え文では「とても大きい、強い地震がありました」という事実が先に述べられ、その後、「どこであったのか」という詳しい情報が加えられている。また、原文では「地震があり、」と動詞の連用形で、後文に接続しているところを、「地震があった。」と一旦文を終了している。

このように「やさしい日本語」とは、庵（2016）の言葉を借りてまとめると、日本人が普段何の調整も加えないで使っている日本語のことではなく、相手の日本語能力に合わせて調整した日本語のことである（p.13）。

2.3 「やさしい日本語」の広がり

前節で述べたように阪神・淡路大震災を背景に成立した「やさしい日本語」であるが、その後、災害時のみではなく平時における情報提供にも使用されるようになっていった。庵（2016）は「やさしい日本語」の性質のうち「地域社会の共通言語として」の役割についても述べてい

る（庵 2016, p.57）。法務省出入国在留管理庁調べによると、2022年6月末現在、在留外国人数は300万人に達した。これはその約10年前、2013年6月末の同庁調査結果の約200万人と比べて、約100万人、1.5倍も増加したことになる。庵（2016）によると、地域社会で暮らす外国人が増えたとき、日本人（日本語母語話者）との間のコミュニケーションをするための共通言語となり得るのが「やさしい日本語」^[注1]なのである（p.40）。

このほか、庵（2016）では、「やさしい日本語」の平時の活用例として、NHKのNEWS WEB EASY（通称「やさしい日本語ニュース」）が紹介されている（pp.45-47）。このサイトでは、NHKが自局で放送したニュースを取り上げ、「やさしい日本語」に書き換えて提供されている。これにより、在住外国人も日本国内のニュースを容易に知ることができる。なお、NEWS WEB EASYの公式サイトでは、サイトの対象者について「外国人の皆さんや、小学生・中学生の皆さんのために」と書かれており^[注2]。日本語母語話者の子どもも対象にしていることが分かる。

また、他にも「やさしい日本語」の日本語母語話者への使用について、打浪（2019）では、知的障害者への情報提供時という応用の可能性が述べられている。また、吉開（2023）では話者の口元を見て言葉を読み取るろう者や聴覚障害者との会話時に「やさしい日本語」を使うことの有用性が述べられている。

以上、見てきたように、「やさしい日本語」は外国人のための災害時の情報提供のための日本語として誕生したが、その後、対象を日本語母語話者にも広げている。「はじめに」で述べたように、筆者の関心は「やさしい日本語」の母語話者にとっての意義を考えることにある。そこで「やさしい日本語」の講座担当者である日本語教師を中心に、「やさしい日本語」に対する意識調査を行った。次章で筆者が行った調査について述べる。

3 調査

3.1 調査時期

調査は2021年2月から2022年1月にかけて行った。

3.2 調査対象者

調査対象者は、市役所、県庁職員、介護職員、学校教員、日本語ボランティア等を対象にした「やさしい日本語」の講座担当者16名であった。年齢の内訳は、30代2名、40代4名、50代6名、60代4名で、性別の内訳は女性13名、男性3名であった。16名中14名は、ボランティア、プライベートレッスン、日本語教育機関のいずれか、またはいずれにおいても指導経験がある日本語教師。16名中2名は、外国人との接触機会がある観光業従事者で、同じく観光業に従事する日本語母語話者に対する「やさしい日本語」の普及活動中の者であった。対象者のうち5名は「やさしい日本語」の講座担当の経験回数が20回以上の「ベテラン」で、5名は経験回数5-10回の「中堅」、6名は調査日より3日以内に初回講座の担当が決定している「初任者」（つまり「やさしい日本語」の知識はあるが、調査時には講座担当は未経験である者）であった。

3.3 調査方法

調査時は、2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した原因不明の肺炎から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行下であった。そこで、調査は非接触方式で行った。調査対象者へ事前に調査依頼をし、承諾が得られた者につき調査依頼書と同意書、アンケートをメールに添付して送信し、同意書とアンケートの返送を依頼した。どちらも提出が確認できた後、オンラインにてインタビュー調査を行った。なお、本稿では回答のうち、インタビューに先立って行ったアンケート調査の結果について述べる。インタビュー調査の結果については、稿を改めて論じる。

4 調査の結果

4.1 結果の分析方法

アンケートの回答はエクセルファイルへの入力後、テキストマイニングを利用して分析した。使用したのはユーザーローカル AI テキストマイニング (<https://textmining.userlocal.jp/>) であった。以下、アンケートの「「やさしい日本語」とは何か」「「やさしい日本語」の連想語（キーワード）は何か」という問いに対する自由記述による回答の分析結果について述べる。

4.2 「ベテラン」「中堅」「初任者」の3者の結果

結果について、「やさしい日本語」の講座担当者の見解として、まずは「ベテラン」「中堅」「初任者」の区別なく、合わせて述べる。

4.2.1 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答の自動要約の結果

「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答を、ユーザーローカルAIテキストマイニングを使って要約し、文書中の重要部をハイライト表示させたところ、以下のような結果が得られた。

「やさしい日本語」とは、
日本語を母語としない人にも伝わりやすいように日本語母語話者が調整して発信する日本語。

（下線は筆者による）

上記が「やさしい日本語」の講座担当者が考えた「やさしい日本語とは」に対する回答の要約結果である。下線を引いた「日本語母語話者」が「伝わりやすい」ように「調整」して「発信」する「日本語」が「やさしい日本語」を表すキーワードになっている。

4.2.2 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答のワードクラウドの頻度順結果

次に、以下の図1に「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答のワードクラウドの頻度順の結果を示した。文字サイズはスコア^[注3]の値に応じた大きさを示されている。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。「やさしい日

本語」のキーワードとして、「日本語」「外国人」「コミュニケーション」「伝わる」等が、頻度が高いことが分かる。

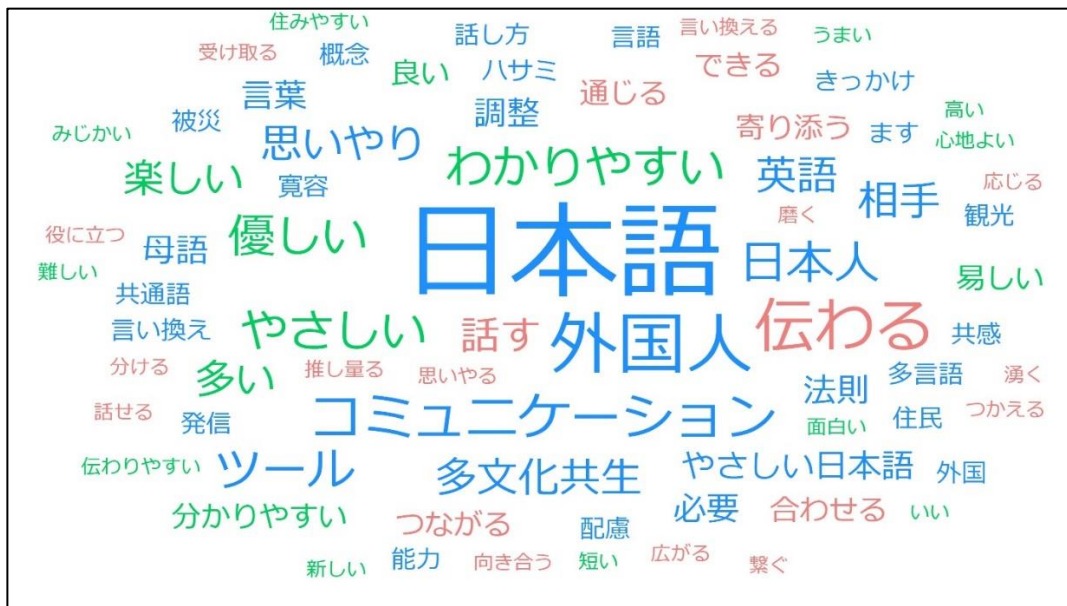


図1 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答のワードクラウドの頻度順結果

4.2.3 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答のワードクラウドのスコア順結果

次に図2に「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答のワードクラウドのスコア順の結果を示した。スコア順の結果では、「やさしい日本語」「多文化共生」「共通語」「母語」「易しい」等が重要語であることが分かる。

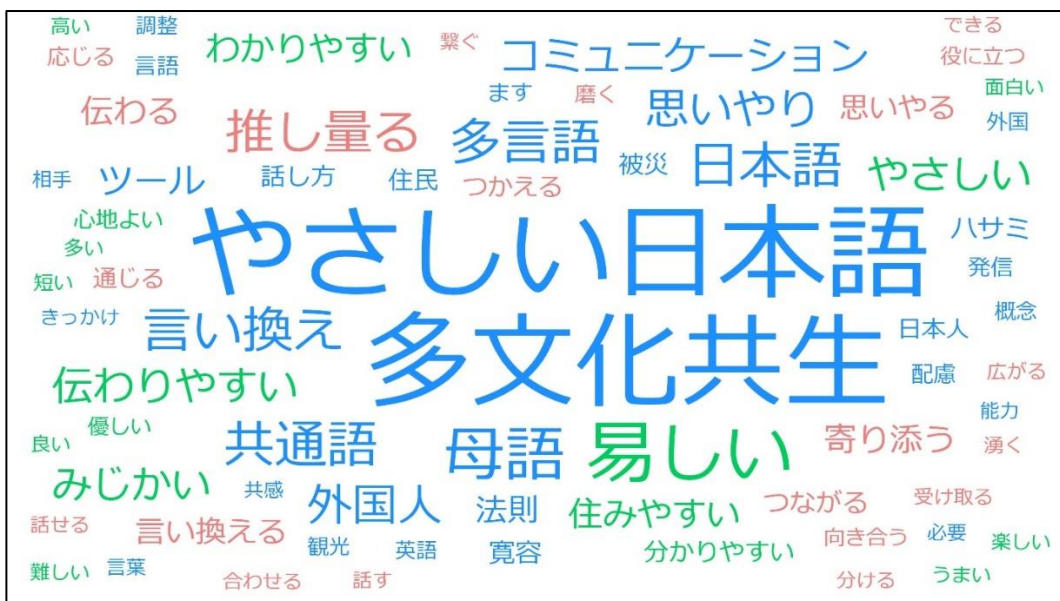


図2 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答のワードクラウドのスコア順結果

4.2.4 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答の単語出現頻度の結果

以下の表1は「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答の単語の出現頻度の結果である。紙片の都合でここでは名詞のみ、そして上位5位までを掲載する。表1に示したように、出現頻度1位の単語は「日本語」(16回)で、2位は「外国人」(9回)、3位「コミュニケーション」(6回)、4位「ツール」と「日本人」(各5回)で、5位は「多文化共生」「思いやり」「英語」「相手」(各4回)であった。これらを合わせると、やはり「やさしい日本語」とは「日本人」が「外国人」との「コミュニケーション」の「ツール」として使う「日本語」ということになる。

表1 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答の単語の出現頻度の結果

名詞	スコア	出現頻度
日本語	8.38	16
外国人	6.12	9
コミュニケーション	4.94	6
ツール	3.34	5
日本人	0.89	5
多文化共生	27.40	4
思いやり	5.56	4
英語	0.45	4
相手	0.15	4

なお、表1の出現頻度の左に表示されている「スコア」の大きさは回答文章の中でその単語がどれだけ特徴的であるかを表すもので、表2は単語をスコア順に並べ直した結果である。こちらも上位5位までを掲載する。スコア順に見ると、「やさしい日本語」とは「多文化共生」のための「共通語」として使用する「日本語」であるという新たな視点が浮かんでくる。なお、「やさしい日本語」の地域社会の「共通言語」という側面は、庵(2016)で指摘されているのと同様の見解である。「やさしい日本語」の講座担当者が考える「やさしい日本語」は、庵(2016)のこの見解と一致することが実証された。

表2 「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答の単語のスコア順の結果

名詞	スコア	出現頻度
やさしい日本語	27.69	3
多文化共生	27.40	4
母語	12.00	3
共通語	8.65	2
日本語	8.38	16

4.3 「ベテラン」と「中堅」の結果の比較

ここまで「ベテラン」「中堅」「初任者」の回答を合わせて見てきたが、ここから3者の回答に相違があるかどうか探るため、3群間の比較を行う。まずは、「ベテラン」と「中堅」の回答に出現した単語の比較をする。なお、3.2で記したが「ベテラン」とは「やさしい日本語」の講座担当の経験回数が20回以上の者で、「中堅」とは経験回数が5-10回の者である。

表3の文字の色は、4.2.2と4.2.3の図1、2と同様に青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。各グループの単語は出現頻度が多い順に並んでいる。表3を概観し、まず気づくのは「ベテラン」の回答によく出現する特徴語として「コミュニケーション」が、「中堅」の特徴語として「ツール」が挙げられていることである。回答の元データを見ると、「中堅」の回答には「やさしい日本語」は「多言語」「英語」に並ぶ「新しい言語」というキーワードも見られ、これにより、「中堅」は「やさしい日本語」を言語「ツール」と見ていることが分かる。一方で、「ベテラン」の回答には「コミュニケーション」という語が挙げられており、「やさしい日本語」を使った「コミュニケーション」という側面を重視していることが分かる。

表3 「ベテラン」「中堅」の単語の比較

ベテランの 回答にだけ出現	ベテランの 回答によく出現	両方の 回答によく出現	中堅の 回答によく出現	中堅の 回答にだけ出現
うまい 住みやすい 心地よい 合わせる 多文化共生 言葉 寛容 理解 社会 能力 調整 配慮 使う 受け取る 向き合う 外す 広がる 思う 掛ける 押し量る 湧く 知る 磨く 繋ぐ 関わる おもてなし すべて そのもの まちづくり	易しい コミュニケーション 日本人	やさしい 優しい 楽しい 外国人 できる 伝わる 寄り添う 通じる きっかけ やさしい日本語 ハサミ ^[注4] 住民	日本語 ツール 必要 英語	話す 分かりやすい 多い 子ども 気持ち 言語 つかえる つながる もつ 使える 分ける 思いやる 気付く 言い換える 話せる いい わかりやすい 新しい 難しい 面白い 高い かんたん ことば インバウンド ドキドキ レベル 万能 世界

さらに詳細に、品詞別に比較をし、表にまとめてみた。表4は名詞についての比較をしたものであるが、「ベテラン」と「中堅」で差が明確に分かる。「中堅」は「やさしい日本語」の使用者の「意識」に関わる語として、「気持ち」という語がスコア100%の語(=回答の割合が100%であること。つまり「中堅」の回答にしか現れなかった語)として挙げられているが、一方で「言語」もスコア100%の語として挙げられている。さらに「ツール」は「中堅」の割合が67%で、

「ベテラン」の割合が33%であった。これにより、前述のように、やはり「中堅」は「やさしい日本語」を言語「ツール」として見ていることが裏付けられた。それに対して「ベテラン」の回答は、「寛容」「理解」「社会」「調整」「配慮」等がいずれもスコア100%の語として挙がっており、「やさしい日本語」の使用者の「意識」「マインド」に関する語が特徴語として見られた。

表5は形容詞について比較したものである。表5からも「中堅」の使用語に特徴があるのが明確に分かる。「分かりやすい」「いい」「新しい」「難しい」「面白い」等は「中堅」のみに出現した「中堅」のスコア100%の語である。「ベテラン」の回答には出現しなかった。これらを見ても「中堅」は「ベテラン」よりも「やさしい日本語」の言語面に注目していることが分かる。

表4 「ベテラン」「中堅」の名詞の比較

名詞		
ベテラン	単語	中堅
100	多文化共生	0
33	日本語	67
100	言葉	0
80	コミュニケーション	20
40	外国人	60
0	子ども	100
100	寛容	0
0	気持ち	100
100	理解	0
100	社会	0
100	能力	0
0	言語	100
100	調整	0
100	配慮	0
33	ツール	67

表5 「ベテラン」「中堅」の形容詞の比較

形容詞		
ベテラン	単語	中堅
100	うまい	0
50	やさしい	50
100	住みやすい	0
100	心地よい	0
60	優しい	40
60	楽しい	40
0	分かりやすい	100
0	多い	100
75	易しい	25
0	いい	100
0	わかりやすい	100
0	新しい	100
0	難しい	100
0	面白い	100
0	高い	100

4.4 「ベテラン」と「初任者」の結果の比較

次に「ベテラン」と「初任者」の比較について述べる。なお、3.2で記したが「ベテラン」とは「やさしい日本語」の講座担当の経験回数が20回以上の者で、「初任者」とは調査日より3日以内に初回講座の担当が決定している者（つまり「やさしい日本語」の知識はあるが、調査時には講座担当の未経験者）のことである。表6が「ベテラン」と「初任者」の回答に出現した単語の比較をしたものであるが、「ベテラン/初任者の回答にだけ出現」した語（筆者注：表

6の最左列と最右列)を見ると、まずは両者で記述量が違うことが分かる。「ベテラン」の方が多く、「初任者」の方が明らかに少ない。その理由は「ベテラン」の方が「初任者」よりも「やさしい日本語」に対して知識があり、意識が深化しているからではないだろうか。

表6 「ベテラン」「初任者」の単語の比較

ベテランの 回答にだけ出現	ベテランの 回答によく出現	両方の 回答によく出現	初任者の 回答によく出現	初任者の 回答にだけ出現
うまい 住みやすい 心地よい 易しい 楽しい 合わせる 言葉 寛容 理解 社会 能力 配慮 いく できる 使う 受け取る 向き合う 外す 寄り添う 広がる 思う 掛ける 推し量る 湧く 知る 磨く 繋ぐ 通じる 関わる	易しい コミュニケーション 多文化共生 日本人 調整	外国人 思いやり	日本語 伝わる	分かりやすい 良い みじかい 伝わりやすい 多い 母語 つながる 入れる 助かる 始まる 届く 役に立つ 応じる 持つ 生まれる 話す

さらに詳細に、品詞別に比較をし、表7、8、9にまとめた。表7は名詞について比較をしたものであるが、表7によると「日本語」については「初任者」の方が「ベテラン」に比べてスコアが高かったが（「初任者」67%：「ベテラン」33%）、「外国人」についてはほぼ同数（「ベテラン」55%：「初任者」45%）で、「コミュニケーション」（90%）と「多文化共生」（88%）「日本人」（71%）については「ベテラン」の方が高かった（「初任者」のスコアは順に、10%、12%、29%）。

「初任者」によく使用されていたのは「日本語」（67%）「外国人」（45%）「日本人」（29%）「母語」（100%）で、組み合わせると「やさしい日本語」とは「母語」が異なる「外国人」のため「日本人」が使う「日本語」のように、単に言語形式に焦点を当てた表面的な意味を表す語であることが分かる。一方、「ベテラン」のキーワードには「コミュニケーション」（90%）「寛容」「理解」「社会」「能力」「配慮」（各100%）「多文化共生」（88%）等、「やさしい日本語」を使用してのインタラクションと、その先にある社会を見据えた語が含まれている。使用者の「意識」「マインド」に関わる、より深層的な語が挙げられていることが分かる。さらに「コミュニケーション」と「多文化共生」を除く語は、「初任者」の回答には一切見られなかったことも興味深い点である。

次に表8は動詞について比較したものであるが、「初任者」の方がスコアが高かったのは「伝わる」のみで（「初任者」67%：「ベテラン」33%）、表中の他の動詞はすべて「ベテラン」のスコアは100%であったが「初任者」は0%、つまり、「ベテラン」の回答にしか見られなかった語であった。これによると、「合わせる」「受け取る」「向き合う」「寄り添う」「思う」「推し量る」等、「やさしい日本語」を使う対象者を思いやり、配慮する言葉が挙げられていることが分かる。

表7 「ベテラン」「初任者」の名詞の比較

名詞		
ベテラン	単語	初任者
33	日本語	67
100	言葉	0
90	コミュニケーション	10
100	寛容	0
100	理解	0
100	社会	0
100	能力	0
100	配慮	0
55	外国人	45
88	多文化共生	12
71	日本人	29
0	母語	100

表8 「ベテラン」「初任者」の動詞の比較

動詞		
ベテラン	単語	初任者
100	合わせる	0
33	伝わる	67
100	いく	0
100	できる	0
100	使う	0
100	受け取る	0
100	向き合う	0
100	外す	0
100	寄り添う	0
100	広がる	0
100	思う	0
100	掛ける	0
100	推し量る	0

最後に「ベテラン」と「初任者」の回答中の形容詞の比較を行った。表9が結果を示したものである。表9を概観すると「ベテラン」と「初任者」のスコアの割合が0%対100%となっている語が多く、「ベテラン」と「中堅」よりもさらに違いが顕著に現れている。「初任者」のスコア100%の語には、「わかりやすい」「良い」「みじかい」「伝わりやすい」等が見られた。「ベテラン」のスコア100%の語には、「やさしい」「住みやすい」「心地よい」「楽しい」等が見られた。これらの語を比較すると、「初任者」が挙げた形容詞はやはり「やさしい日本語」の言語形式に注目した語が多く、「ベテラン」が挙げたのは抽象的であるが深層的な語であり、情緒面まで踏み込んだ語であることが分かる。「やさしい日本語」の本質に迫る語と言えるかもしれない。このように、「ベテラン」と「初任者」のキーワードを比較すると、両者の違いが顕著になった。

表9 「ベテラン」「初任者」の形容詞の比較

形容詞		
ベテラン	単語	初任者
100	うまい	0
100	やさしい	0
0	わかりやすい	100
100	住みやすい	0
100	心地よい	0
100	易しい	0
100	楽しい	0
75	優しい	25
0	良い	100
0	みじかい	100
0	伝わりやすい	100
0	多い	100

ここまでをまとめると、「ベテラン」と「初任者」の比較を通して、「初任者」の回答は、「日本語」「外国人」「日本人」「母語」「伝わる」「わかりやすい」「良い」「みじかい」「伝わりやすい」等、「やさしい日本語」の表面的な意味と言語形式を表す語が特徴的であることが分かった。一方、「ベテラン」の回答は、「コミュニケーション」「寛容」「理解」「社会」「能力」「配慮」「多文化共生」「向き合う」「寄り添う」「思う」「推し量る」「やさしい」「住みやすい」「心地よい」「楽しい」等、より観念的、深層的な語が特徴として見られた。これについて筆者は、「ベテラン」は「やさしい日本語」の講座担当経験を重ねるにつれ、「多文化共生」への態度、「意識」「マインド」に変化が起こったからではないかと考えた。この仮説を検証するため、一名の調査対象者に対し、追加のインタビューを試みた。

5 追調査

5.1 調査時期

追調査は2023年12月に行った。

5.2 調査対象者

調査対象者は、2021年10月に調査した60代女性1名である。2021年の調査時には対象者は「やさしい日本語」の講座経験回数5-10回の「中堅」であったが、今回の調査時には経験回数20回以上の「ベテラン」となっていた。

4章で述べた調査の結果から、「ベテラン」と「中堅」「初任者」の間には、「やさしい日本語」

に対する「意識」「マインド」面で相違点があることが分かった。「ベテラン」と「初任者」の方がその差は顕著であったが、前回調査時に「初任者」であった者の中に、今回までに「ベテラン」となった者がいなかったため、前回「中堅」で、今回は「ベテラン」になっていた者のうち一名に追加のインタビューを依頼することにした。

5.3 調査方法

調査方法は、前回と同様、非接触方式で行った。対象者へ事前に調査依頼をし、承諾を得たあと、アンケートをメールに添付して送信し、返送を依頼した。その後、アンケートの回答を参照しながら、オンラインにて約 60 分間のインタビューを行った。なお、オンラインインタビューは Zoom を用いて行い、同意を得て録画し、事後、会話内容を文字起こしし分析した。

5.4 調査結果

調査対象者には、「中堅」から「ベテラン」へとなった現在「やさしい日本語」についてどのような考えを持っているのか尋ねたあと、2年前の自身の「やさしい日本語」についてのアンケートの回答を見てもらい、現在との相違点があるかどうか尋ねた。以下にインタビューの回答結果の一部を示す。

(注：自身が2年前に書いた回答を見ながら) 2年前には、「やさしい日本語」の講座に、言い換えの練習がたくさん必要だと思って、そういうことをたくさんやっていた。考え方って言うよりは、気づいてもらうための方法が少なかったのかもしれない。今はそれよりは、みなさんにやさしい気持ちを分かってもらおうって言うか、気づいてもらおうって言うような講座にしているのかもしれない。(中略) このときの回答は、主にね、そういう書き換えとか、そういうのをいっぱいしていた時の影響ですね。「ハサミの法則」のことも書いているし。練習が必要。練習、練習…。そうした方がいいよっていうことですね。でも、どれだけ練習してもやっぱりその、やさしい気持ちがないと、ただ書き換えたっていうだけになるかなと思います。

(下線は筆者による)

回答の補足をすると、対象者は2年前、「やさしい日本語」とは何か？連想語は？」という質問に対して、以下のような語を挙げていた。「ハサミの法則」「言い換えが必要」「敬語でなく、です、ます、でいい」「話すのには練習が必要」等。今回実施した上記インタビューの回答は、これらの回答を見ながらの感想であった。つまり、2年前、「中堅」の時に挙げていたキーワードは、当時、自身の「やさしい日本語」講座で重視していたことで、言語形式を重視した言い換え練習をさせていた影響があるということである。しかし、最近の講座では、気づきを促すワークショップを取り入れ進行しているそうであった。彼女はまた、「どれだけ言い換えの練習をしても、やさしい気持ちがないと、ただ書き換えただけになる」と述べていた(インタビュー回答中の下線部)。

実際にインタビュー直近の2023年11月に、回答者が在住する某県の〇〇刑務所で刑務官に対して行った「やさしい日本語」の講座では、時間の制約もあったことにより、言い換え練習

の時間はまったく取らなかったそうである。インタビューの中で「自分たちでどうしたらいいのか、気づいてもらうような形にした」と述べていた。このワークショップの内容の変化は、そのまま彼女自身の「やさしい日本語」に対する「意識」「マインド」の変化であると言える。

以上のように、インタビューを通じて、「中堅」の時には「やさしい日本語」の言語形式に注目していたが、「ベテラン」となった現在は「やさしい気持ち」を持って「やさしい日本語」を使うと言う「意識」「マインド」の方に軸が移っていることが分かった。これは対象者一名の結果であるが、4章末尾で述べた筆者の「やさしい日本語」の講座担当者は経験を重ねるにつれ、「多文化共生」への態度、「意識」「マインド」に変化が起こる」という仮説を裏付けるものであった。

6 まとめと今後の課題

本稿の調査結果により、「やさしい日本語」講座担当者の「初任者」「中堅」については、主に日本語の形式に関する語が、「ベテラン」については外国人との接触場面に関する語が「やさしい日本語」のキーワードとして見られた。つまり、講座担当の経験を重ねた者は、他者への「やさしい日本語」の指導を通して、より「多文化共生」へと態度の変化、「意識」に変化が見られたということである。庵（2019）では、「やさしい日本語」にとって重要なのは、「技術」よりも「マインド（考え方）」であることが指摘されているが（pp.14-15）、本調査の結果から、「ベテラン」が重視することと一致することが分かった。筆者は母語話者にとって「やさしい日本語」の使用は、日本語力を鍛えるだけでなく、「多文化共生」への態度の涵養に繋がり、自己成長の糧になると考えている。本稿の調査結果から、今後、母語話者にとっての「やさしい日本語」の「意識」「マインド」面における意義について考える示唆を得た。

本稿の調査は対象者が「やさしい日本語」の講座担当者のみであったが、今回は対象者の範囲を広げ、「やさしい日本語」の日本語母語話者にとっての「意識」「マインド」に関する意義についてさらに追究したい。

付記

本稿の調査は、愛知淑徳大学 2021 年度特定課題研究の助成を受けて行ったものである（研究課題番号：21TT26、研究題目：「やさしい日本語」指導者の「やさしい日本語」に対する意識）。

また、本稿は言語文化教育研究会第 9 回年次大会（2023 年 3 月 5 日、於：関西大学）において、「やさしい日本語」講座担当者が考える「やさしい日本語」とは何か」と題し行った発表内容に、大幅に加筆・修正をしたものである。

注

1. 庵（2016）では、災害時の情報提供の際に使われるのは「やさしい日本語」で、平時の情報

提供に使用されるのは〈やさしい日本語〉と区別して表記されているが、本稿では特に境界を定めることなく、どちらも「やさしい日本語」と表記する。

2. NHKのNEWS WEB EASY公式サイト「NEWS WEB EASYについて」(<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>) (2024/01/07 最終確認)。
3. テキストマイニングでは「一般的な文書でよく出る単語(筆者注:「今日」や「思う」「ある」等)は、重要ではないため、重み付けを軽くする」、いっぽう「一般的な文書ではあまり出現しないけれど、調査対象の文書だけによく出現する単語は重視する」仕組みが取り入れられている。出現回数だけでなく、重要度を加味した値が「スコア」である。スコアが高い単語は、そのテキストを特徴づける単語であると言える(ユーザーローカル AI テキストマイニング(https://textmining.userlocal.jp/questions#data_q2)) (2023/12/31 最終確認)。
4. 「ハサミ」とは吉開(2023)が述べる「ハサミの法則」のこと。吉開(2023)は「やさしい日本語」で話すとき、「はっきり言う」「さいごまで言う」「みじかく言う」(下線は筆者)の3つのルールが一番基本の心得で、その頭文字を取って「ハサミの法則」と呼んでいる(p.66)。回答者が挙げた「ハサミ」はこの吉開(2023)が述べる「ハサミの法則」のことである。

参考文献

- 庵功雄(2015)「「やさしい日本語」研究が日本語母語話者にとって持つ意義－「やさしい日本語」は外国人のためだけのものではない－」『一橋大学国際教育センター紀要』6, pp.3-15
- 庵功雄(2016)『やさしい日本語－多文化共生社会へ』株式会社岩波書店
- 庵功雄(2019)「マインドとしての〈やさしい日本語〉－理念の実現に必要なもの－」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版, pp.1-21
- 庵功雄(2021)「日本語表現にとって「やさしい日本語」が持つ意味」『一橋日本語教育研究』9, pp.121-134
- 宇佐美洋(2019)「母語話者にとっての〈やさしい日本語〉は学ぶに値するものか－「生涯学習」という視点からの再考－」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版, pp.67-82
- 打浪文子(2019)「知的障害者の情報保障と〈やさしい日本語〉－一般社団法人スローコミュニケーションのとりくみを例に－」庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編『〈やさしい日本語〉と多文化共生』ココ出版, pp.225-238
- 文化庁国語課(2020)「令和元年度 国語に関する世論調査」
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/92882501_01.pdf (2023/12/31最終確認)
- 松田陽子・前田理佳子・佐藤和之(2000)「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学』7, pp.145-159
- 吉開章(2023)『増補版 入門・やさしい日本語 外国人と日本語で話そう』アスク